

(2) 遊びを通しての総合的な指導

① 幼児期における遊び

幼児期の生活のほとんどは、遊びによって占められている。遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちと思うがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れ、そのかわり合いそのものを楽しむことにある。すなわち遊びは遊ぶこと自体が目的であり、人の役に立つ何らかの成果を生み出すことが目的ではない。しかし、幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている。

遊びにおいて、幼児が周囲の環境に思うがままに多様な仕方でかわるということは、幼児が周囲の環境に様々な意味を発見し、様々なかわり方を発見するということである。例えば、木の葉を木の葉として見るだけではなく、器として、お金として、切符として見たりする。また、砂が水を含むと固形状になり、さらには、液状になることを発見し、その状態の変化とともに、異なったかわり方を発見する。これらの意味やかわり方の発見を幼児は、思考を巡らし、想像力を発揮して行うだけでなく、自分の体を使って、また、友達と共有したり、協力したりすることによって行っていく。そして、この発見の過程で、幼児は、達成感、充実感、満足感、挫折感、葛藤^{かっとう}などを味わい、精神的にも成長する。

このように、自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は心身全体を働かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で、自発的活動としての遊びは、幼児期特有の学習なのである。したがって、幼稚園における教育は、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要である。

② 総合的な指導

遊びを展開する過程においては、幼児は心身全体を働かせて活動するので、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく。つまり、幼児期には諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである。

例えば、幼児の言語を使った表現は、幼児が実際にいる状況に依存しているため、その状況を共有していない者にとって、幼児の説明は要領を得ないことが多い。しかし、友達と一緒に遊ぶ中で、コミュニケーションを取ろうとする意識が高まり、次第に状況に依存しない言語表現力が獲得されていく。

言語能力が伸びるにつれて、言語により自分の行動を計画し、制御するようになるとともに、自己中心的な思考から相手の立場に立った思考もできるようになる。こうして社会性、道徳性が培われる。そのことは、ますます友達と積極的にかかわろうとする意欲を生み、さらに、友達と遊ぶことを通じて運動能力が高まる。そして、より高度で複雑な遊びを展開することで、思考力が伸び、言語能力が高まる。象徴機能である言語能力の発達は、見立てやごっこ遊びという活動の中で想像力を豊かにし、それを表現することを通して促される。このように、遊びを通して幼児の総合的な発達が実現していく。

遊びを通して総合的に発達をとげていくのは、幼児の様々な能力が一つの活動の中で関連して同時に発揮されており、また、様々な側面の発達が促されていくための諸体験が一つの活動の中で同時に得られているからである。例えば、幼児が何人かで段ボールの家を作っているとする。そのとき幼児たちは大まかではあるが、作ろうとする家のイメージを描く。そのことで幼児は作業の段取りを立て、手順を考えるというように、思考力を働かせる。一緒に作業をするために、幼児たちは自分のイメージを言葉や身体の仕事などを用いて伝え合うことをする。相互に伝え合う中で、相手に分かってもらえるように自分を表現し、相手を理解しようとする。このようなコミュニケーションを取りながら一緒に作業を進める中で、相手に即して自分の行動を規制し、役割を実行していく。また、用具を使うことで身体の運動機能を発揮し、用具の使い方を知り、素材の特質を知っていく。そして、家が完成すれば、達成感とともに、友達への親密感を覚える。

このように、一つの遊びを展開する中で、幼児たちはいろいろな経験をし、様々な能力や態度を身に付ける。したがって、具体的な指導の場面では、遊びの中で幼児が発達していく姿を様々な側面から総合的にとらえ、発達にとって必要な経験が得られるような状況をつくることを大切にしなければならない。そして、幼稚園教育のねらいが総合的に実現するように、常に幼児の遊びの展開に留意し、適切な指導をしなければならない。幼児の生活そのものともいえる遊びを中心に、幼児の主体性を大切にする指導を行おうとするならば、それはおのずから総合的なものとなるのである。

(3) 一人一人の発達の特性に応じた指導

① 一人一人の発達の特性

幼児の発達の姿は、大筋で見れば、どの幼児も共通した過程をたどると考えられる。幼児を指導する際に、教師はその年齢の多くの幼児が示す発達の姿について心得ておくことは、指導の仕方を大きく誤らないためには必要である。しかし、それぞれ独自の存在としての幼児一人一人に目を向けると、その発達の姿は必ずしも一様ではないことが分かる。

幼児は、一人一人の家庭環境や生活経験も異なっている。それゆえ、一人一人の人や事物へのかかわり方、環境からの刺激の受け止め方が異なってくる。例えば、同じ年齢の幼児であっても、大胆で無秩序な世界を好む幼児もいれば、逆に、自制的で整然とした世界を好む幼児もいる。そういう二人が、幼稚園生活を送る過程で、前者の幼児が秩序を受け入れるようになっていたり、後者の幼児が大胆さを受け入れるようになっていたりする。

このように、幼児一人一人の環境の受け止め方や見方、環境へのかかわり方が異なっているのである。すなわち、幼児はその幼児らしい仕方で環境に興味や関心をもち、環境にかかわり、何らかの思いを実現し、発達するために必要ないろいろな体験をしているのである。幼児のしょう

としている行動が、多くの幼児が示す発達の姿から見ると好ましくないと思えることもある。しかし、その行動をし、その行動を通して実現しようとしていることがその幼児の発達にとって大事である場合がしばしばある。それゆえ、教師は、幼児が自ら主体的に環境とかかわり、自分の世界を広げていく過程そのものを発達にとらえ、幼児一人一人の発達の特性（その幼児らしい見方、考え方、感じ方、かかわり方など）を理解し、その特性やその幼児が抱えている発達の課題に応じた指導をすることが大切である。

ここでいう「発達の課題」とは、その時期の多くの幼児が示す発達の姿に合わせて設定されている課題のことではない。発達の課題は幼児一人一人の発達の姿を見つめることにより見いだされるそれぞれの課題である。その幼児が今、興味や関心をもち、行おうとしている活動の中で実現しようとしていることが、その幼児の発達にとっては意味がある。したがって、発達の課題は幼児の生活の中で形を変え、いろいろな活動の中に表現されることもある。例えば、内気で消極的な幼児が、鉄棒をしていた友達がいなくなってから一人で鉄棒にぶら下がってみたり、あるいは皆が縄跳びに興じているのをすぐそばで楽しそうに掛け声を発したりしながら見ている場合、その幼児はそれまで苦手になっていたことに挑戦しようとしていると理解することができるだろう。そして、挑戦した結果、成功すれば、その幼児は自信をもつと考えられる。そうであれば、今この幼児の発達の課題は自信をもつことであるといえる。

このように、教師は幼児一人一人の発達の特性と発達の課題を把握し、その幼児らしさを損なわないように指導することが大切である。

② 一人一人に応じることの意味

①に述べたように、幼児は一人一人が異なった発達の姿を示す。それゆえ、教師は幼児の発達に即して、一人一人に応じた指導をしなければならない。幼児は、自分の要求を満たしてくれる教師に親しみや自分に対する愛情を感じて信頼を寄せるものである。しかし、幼児一人一人に

○ 2 教育課程の編成

(1) 教育課程の意義

幼稚園は意図的な教育を目的としている学校であり、幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼児期にふさわしい生活を通して、幼稚園教育の目的や目標の達成に努めることが必要である。このため、幼児の発達を見通し、その発達が可能となるよう、それぞれの時期に必要な教育内容を明らかにし、計画性のある指導を行うことが求められる。

このような意味から、それぞれの幼稚園は、その幼稚園における教育期間の全体にわたって幼稚園教育の目的、目標に向かってどのような道筋をたどって教育を進めていくかを明らかにし、幼児の充実した生活を展開できるような全体計画を示す教育課程を編成して教育を行う必要がある。

教育課程の実施に当たっては、幼稚園教育の基本である環境を通して行う教育の趣旨に基づいて、幼児の発達や生活の実情などに応じた具体的な指導の順序や方法をあらかじめ定めた指導計画を作成して教育を行う必要があり、教育課程は指導計画を立案する際の骨格となるものである。

(2) ねらいと内容を組織すること

幼稚園教育要領の第2章において各領域に示されている「ねらい」と「内容」は、幼稚園教育の全体を見通しながら幼児の発達の側面を取り上げたねらいや内容であり、幼稚園教育の全期間を通して育てるものである。そのため、教育課程の編成に当たっては、幼稚園教育要領に示されている「ねらい」や「内容」をそのまま教育課程における具体的な指導のねらいや内容とするのではなく、幼児の発達の各時期に展開される生活に応じて適切に具体化したねらいや内容を設定する必要がある。

具体的なねらいと内容を組織するに当たっては、まず、それぞれの幼稚園で入園から修了までの教育期間において、幼児がどのような発達をしていくかという発達の過程をとらえる必要がある。それぞれの発達の

時期において幼児は主にどのような経験をしていくのか、また、教育目標の達成を図るには、入園から修了までを通してどのような指導をしなければならないかを、各領域に示す事項に基づいて明らかにしていく必要がある。

(3) 幼児期の発達の特性を踏まえること

教育課程の編成に当たっては、幼稚園教育の内容及び幼児の発達と生活についての十分な理解をもつことが大切である。特に、幼児期においては、自我が芽生え、自己を表出することが中心の生活から、次第に他者の存在を意識し、他者を思いやったり、自己を抑制したりする気持ちが生まれ、同年代での集団生活を円滑に営むことができるようになる時期へ移行していく。教育課程の編成に当たっては、このような幼児期の発達の特性を十分に踏まえて、入園から修了までの発達の見通しをもち、きめ細かな対応が図れるようにすることが重要である。

(4) 入園から修了に至るまでの長期的な視野をもつこと

発達の時期をとらえるためには様々な視点があり、それぞれの幼稚園の実情に応じて考えるべきものである。このような視点の一つとして、教育課程が、指導計画を作成し、環境にかかわって展開される生活を通して具体的な指導を行うための基盤となるものであることから、

- ・ 幼児の幼稚園生活への適応の状態、興味や関心の傾向
- ・ 季節などの周囲の状況の変化などから実際に幼児が展開する生活が大きく変容する時期

をとらえることなども考えられよう。その一例を挙げれば、次のようなものとなる。

- ア) 一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期
- イ) 周囲の人やものへの興味や関心が広がり、生活の仕方やきまりが分

かり、自分で遊びを広げていく時期

ウ) 友達とイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく時期

エ) 友達関係を深めながら自己の力を十分に発揮して生活に取り組む時期

オ) 友達同士で目的をもって幼稚園生活を展開し、深めていく時期

発達の各時期にふさわしい具体的なねらいや内容は、第2章の各領域に示された「ねらい」や「内容」のすべてを視野に入れるとともに、幼児の生活の中で、それらがどう相互に関連しているかを十分に考慮して設定していくようにすることが大切である。

(5) 教育課程の編成の実際

教育課程はそれぞれの幼稚園において、全教職員の協力の下に園長の責任において編成するものである。

既に述べたように、幼稚園教育は法令や幼稚園教育要領に基づいて行われるものであるので、全教職員がそれぞれに示されていることについての理解を十分にもつと同時に、実践を通してそれぞれの幼稚園の実態に即した教育課程となるようにすることが大切である。

また、教育の内容や方法が幼児の発達の実情に即したものでなければ、教育の効果を生み出すことができない。そこで、教育課程の編成に当たっては、それぞれの幼稚園に累積されている資料などから幼児の発達の過程や実情を的確に把握する必要がある。

さらに、それぞれの幼稚園は、地域環境や幼稚園自体がもっている人的、物的条件が違っており、それぞれ異なった特色を有している。幼児の生活や発達はそのような条件に大きく影響を受けるものであるので、このような幼稚園や地域の実態を把握して、特色を生かし、創意のある教育課程を編成しなければならない。

編成の手順には一定したものはないが、その一例を挙げれば、およそ次のとおりである。

具体的な編成の手順について（参考例）

- ① 編成に必要な基礎的事項についての理解を図る。
 - ・ 関係法令、幼稚園教育要領、幼稚園教育要領解説などの内容について共通理解を図る。
 - ・ 自我の発達の基礎が形成される幼児期の発達、幼児期から児童期への発達についての共通理解を図る。
 - ・ 幼稚園や地域の実態、幼児の発達の実情などを把握する。
 - ・ 社会の要請や保護者の願いなどを把握する。
- ② 各幼稚園の教育目標に関する共通理解を図る。
 - ・ 現在の教育が果たさなければならない課題や期待する幼児像などを明確にして教育目標についての理解を深める。
- ③ 幼児の発達の過程を見通す。
 - ・ 幼稚園生活の全体を通して、幼児がどのような発達をするのか、どの時期にどのような生活が展開されるのかなどの発達の節目を探り、長期的に発達を見通す。
 - ・ 幼児の発達の過程に応じて教育目標がどのように達成されていくかについて、およその予測をする。
- ④ 具体的なねらいと内容を組織する。
 - ・ 幼児の発達の各時期にふさわしい生活が展開されるように適切なねらいと内容を設定する。その際、幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して、幼稚園生活全体を通して、幼稚園教育要領の第2章に示す事項が総合的に指導され、達成されるようにする。
- ⑤ 教育課程を実施した結果を反省、評価し、次の編成に生かす。

(5) 反省・評価と指導計画の改善

その際、幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての反省や評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図ること。

幼稚園における指導は、幼児理解に基づく指導計画の作成、環境の構成と活動の展開、幼児の活動に沿った必要な援助、反省や評価に基づいた新たな指導計画の作成といった循環の中で行われるものである。指導計画は、このような循環の中に位置し、常に指導の過程について実践を通して反省や評価を行い、改善が図られなければならない。

保育における反省や評価は、このような指導の過程の全体に対して行われるものである。この場合の反省や評価は幼児の発達の理解と教師の指導の改善という両面から行うことが大切である。幼児理解に関しては、幼児の生活の実態や発達の理解が適切であったかどうかなどを重視することが大切である。指導に関しては、指導計画で設定した具体的なねらいや内容が適切であったかどうか、環境の構成が適切であったかどうか、幼児の活動に沿って必要な援助が行われたかどうかなどを重視しなければならない。さらに、これらの反省や評価を生かして指導計画を、改善していくことは、充実した生活をつくり出す上で重要である。

また、このような反省や評価を自分一人だけで行うことが難しい場合も少なくない。そのような場合には、他の教師などに保育や記録を見てもらい、それに基づいて話し合うことによって、自分一人では気付かなかった幼児の姿や自分の保育の課題などを多角的に反省や評価していくことも必要である。

このようにして、教師一人一人の幼児に対する理解や指導についての考え方を深めることが大切であり、そのためには、互いの指導事例をもち寄り、話し合うなどの園内研修の充実を図ることが必要である。

○ 2 入園から修了までの生活

(3) 幼児の生活は、入園当初の一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期から、やがて友達同士で目的をもって幼稚園生活を展開し、深めていく時期などに至るまでの過程を様々に経ながら広げられていくものであることを考慮し、活動がそれぞれの時期にふさわしく展開されるようにすること。その際、入園当初、特に、3歳児の入園については、家庭との連携を緊密にし、生活のリズムや安全面に十分配慮すること。また、認定こども園（就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（平成18年法律第77号）第6条第2項に規定する認定こども園をいう。）である幼稚園については、幼稚園入園前の当該認定こども園における生活経験に配慮すること。

指導計画の作成においては、入園から修了まで幼児の生活する姿がどのように変容するかという発達の過程をとらえ、発達の見通しをもつことが大切である。発達には個人差があり、様々な道筋があることはいうまでもないが、大筋でみると同じような道筋をたどるものである。

入園から修了までの発達の過程を大きくとらえてみると、次のようにまとめられるであろう。入園当初においては、一人一人が好きなように遊んだり、教師と触れ合ったりしながら、幼稚園生活に親しみ、安定へ向かう。安定した生活が得られると次第に周囲の人やものへの興味や関心が広がり、生活の仕方やきまりが分かり、自分でいろいろな遊びに興味をもって取り組むようになる。さらに、友達とイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知り、友達からの刺激を受けて遊びを広げていくようになる。このような過程を経て、友達関係を深めながら自己の力を十分に発揮して生活するようになり、友達同士で目的に向かって活動を展開しながら、友達を思いやったり、自己を抑制しようとしたりする

気持ちが生まれるようになる。

このような入園から修了までの幼児の生活する姿は、幼稚園の実態によって様々であり、それぞれの幼稚園においてその実態に即した方法でとらえることが大切である。

また、発達はそのそれぞれの時期にふさわしい生活が展開されることによって促されるものである。例えば、入園当初において、自分の好きなものにかかわって過ごすことによって新しい生活の中で安定感をもつようになる。さらに、その安定感をもつことによって、周囲の環境に対して興味や関心をもってかかわるようになり、いろいろな遊びを知っていく。必要な経験を積み重ねることによって初めて望ましい発達が促されていくので、先を急ぎ過ぎたり、幼児にとって意味ある体験となることを見逃してしまったりすることのないようにすることが大切である。

なお、入園当初においては、幼稚園生活がこれまでの生活と大きく異なるので、家庭との連携を緊密にすることによって、個々の幼児の生活に理解を深め、幼児が安心して幼稚園生活を送ることができるよう配慮することが必要である。このため、例えば、家庭のように安心できる雰囲気のある保育室の環境をつくることなどが考えられる。一人一人のその幼児らしい姿を教師が受け止め、きめ細かくかかわることによって、幼児は安心して自分を出表できるようになり、次第に周りにいる他の幼児の存在に気付き、かかわりがもてるようになっていき、幼児は充実した幼稚園生活が送れるようになっていく。したがって、幼児の行動や内面を理解する教師の役割は極めて重要である。

特に、3歳児については、自我の芽生え始める時期であること、家庭での生活経験などの差による個人差が大きい時期であることなどの発達の特性を踏まえ、一人一人に応じたきめ細かな指導が一層必要である。また、一人一人の生活の仕方やリズムに配慮して1日の生活の流れを考えることが必要である。さらに3歳児は周囲の状況を顧みず、興味のままに動いてしまうこともあるので、安全については十分な配慮が必要

である。

認定こども園とは、小学校就学前の子どもに教育・保育を一体的に提供するものであり、同じ施設の中に保育所（認可外保育所含む）と幼稚園が存在することがある。また、例えば、一人の幼児について考えると、まず保育所に在籍し、その後同じ施設内の幼稚園に入園することがある。そのため、認定こども園である幼稚園では、幼児は、同じ施設の中で幼稚園入園前から集団での生活を過ごすなど、家庭から幼稚園に入園する幼児とは異なった生活経験をしている場合があり、幼稚園入園後は、このような生活経験を生かした活動を展開することが大切である。しかし、その際に忘れてはならないのは、同じ施設であっても、例えば、生活のリズム、集団の大きさなど、幼稚園入園前後での生活が異なる点もあることである。その変化を十分に把握しつつ、幼児の実情に応じた幼稚園生活を送ることができるように配慮することも必要である。これらの点に配慮して幼稚園生活を展開するためには、幼稚園の教育活動を担当する教師と幼稚園入園前の保育を担当する保育士が連携し、円滑な接続を図ることが大切である。また、家庭から幼稚園に入園する幼児と同じ施設からそのまま幼稚園に入園する幼児が、家庭や地域での生活の経験や集団生活の経験などが異なることを考慮して、幼稚園の1日の生活の流れや環境を工夫することが大切である。

さらに、国際化の進展に伴い、幼稚園では外国人や海外から帰国した幼児の受け入れが多くなっている。これらの幼児の多くは、日本以外の国での生活経験などを通して、我が国の社会とは異なる言語や生活習慣などを身に付けているが、その実情は幼児によって異なっている。このため、これらの幼児の受け入れに当たっては、教師自身が、当該幼児が暮らしていた国の生活などに関心をもち、理解しようとする姿勢を保ち、一人一人の幼児の実情を把握し、その幼児が安心して自己を十分に発揮することができるよう配慮することが大切である。また、教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で、自然に日本語に触れたり、日本の生活